

見る・見える・見えない

永倉 みゆき

その文章と出会った時は、今の自分の胸の内を見透かされたようでどきりとした。それは村上春樹の小説『アフターダーク』の中にあるこんな文である。『……私たちの視点は架空のカメラとして、部屋の中にあるそのような事物を、ひとつひとつ拾い上げ、時間をかけて丹念に映し出していく。私たちは目に見えない無名の侵入者である。』

私たちは見る。耳を澄ませる。においを嗅ぐ。……観察はするが、介入はしない。』この小説の中には、小説世界を見ている“私たち”という主体が書かれており、出来事は、それを見ている私たちの前に起こる事実の描写の列挙によって描かれている。“私たち”という主語は出来事の進行の中でいつしか消えていき、読者である私は時

折、登場人物の言動に感情を移入しながら読み進めるのだが、小説世界に完全に溶け込むことはできず、自分と小説世界を隔てるオブジェクトの様な壁の感触は最後まで残る。しかし、にも拘らず登場人物の気持ちやそこに醸し出される雰囲気のもの、わかるのである。

これは正に、私が悩み、それを巡ってぐるぐると考えていたことだ。そのことが、言葉になつてこんな風に書かれているなんて。

私は昨年四月に二十三年間いた保育現場を離れ、転職した。今度は子どもが居ない職場であったため、知人のいる保育園で週一回参加観察ができることになり嬉々として通い始めたのだが、しばらくして愕然としたのだ。――記録を細かくとることはできても「子ども」が見えてこない。時間が短いからかと時間を延ばしてみても同じである。わけもわからず重い気持ちを抱えて悶々と

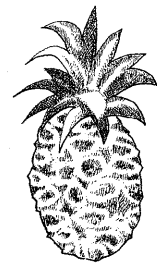
していた頃、この文章に出会ったのだ。

そうだ。全くこの小説の世界の感触と同じだ。この中に出てくる「私たち」とは一体誰だ。見えているものは一体何だ。誰が、何を通して何を見ているのか――。私は今、目の前に展開される出来事を今までに無く細かく見る機会をもらっている。それなのに、子どもが見えないと感じている。それならば逆に、今まで私に「見えて」いた子どもは何だったのだろうか。「見える」とはどういうことだったのだろうか。

ここで「子どもが見える」という感覚について考えてみる。私にとって「子どもが見える」とは、自分と子どもとの関係に一体感が感じられる時だ（気が合う、という意味ではなく、たとえぎくしゃくした関係であってもその軋轢が直に感じられるという意味で）。譬えて言えば、一つのボールを挟んでびったりくつつき合っている様

な、相手の気持ちがあるボールを通して感じ取れる様な関係、と言ったら良いだろうか。年度が変わり新しいクラスになった時、最初はボールに譬えるならキャッチボールをしている様な関係を繰り返す中で、私と子どもたち、または子どもたち同士の間にも、おぼろげながら何かの形が生まれてくる。すると私の中に何だか身体が広がっていく様な、子どもたちひとりひとりが広がった自分の身体の一部である様な感覚が生まれてくるのだ。

そのことがわかったのは、長く勤めていた幼稚園から小学校に転任になった時だった。一年生を担任した私は、休み時間になると、広い運動場の果てまで遊びに行ってしまうような（しかも教室は二階）教師と子どもとの関係のあり方に本当にびっくりした。運動場の果てで遊んでいる子のことを今までの様に自分とのつながりで感じることができるとか不安になったことを今でも



覚えている。今思えば、その世界の広がり、担任との距離は、大人の庇護のない所で歩き始めた子どもたちの成長の証だったのである。幼稚園で私は、実際には全て見ることは不可能であるのに、感覚を広げ子どもたちを感じていることで、見えていくという安心感をもって生活していたのだ。

学生であった頃、心理劇の授業で「見えない台の上でバランスをとる」という課題が出たことがある、はじめは一人対一人で、互いに台の端に向かい合って立った所をイメージし、相手の動きに合わせてバランスを取り合って動く。次に片方にもう一人が入る。一人対二人になり、また新たに

釣り合う一点を探して互いに動く。そのうちどんどん相手方の人数が増えるに従いこちらの居方の重みが変わっていくのがわかる。体がどんどん広がっていくイメージ。保育者としてクラスの子のことを感じつつ生活するのは、このレッスンの時に得た感じと似ているのかもしれない。保育者であった時の私は、多分子どもたちと「見えない

台」の上でバランスを取り合いながらその中で子どもを捉えて「見えている」と感じていたのだろう。そして、今の私は、子どもの姿は多分保育者で動きながら見ていた時よりもじっくりと見てはいるのだけれど、一緒に台の上でバランスを取り合う関係にないために「見える」と感じる事ができないのだろう。

保育現場を離れ、一つまた一つとこんな発見が出てくる。つくづく保育とは、不思議な体験だったのだと思う。知らない内に、子どもたちと培っ

てきたものが、私の体の中に、私の感覚の一部となつて存在しているのだから。

先日、今の職場に昨年度担任していた三年生の女の子が四人遊びに来た。彼女らが、楽し気に喋り、他愛もないことを喜んで遊ぶ様子を見ていて、今までになく心が和んでいる自分に気が驚いた。先生と生徒という付き合いの中で、目に見えない安らぎの場がお互いの間に作られていたのだ。確かに。

「見える」ということは現実に目に「見えて」いるからこそ「見えた」と錯覚してしまうのかもしれない。「見えた」ことが、私と子どもとのバランスのとりに合いの中で「見えた」と感じられていたのだということが実感としてようやくわかった。保育の場にいたからこそ得られた宝物であると思う。

(常葉学園短期大学)